

■ 白石区災害防止協力会について



白石区災害防止協力会

会長 武藤 征一

ムトウ建設工業(株)代表取締役社長

発災は地球が天空の一角に浮いて太陽からの熱的、光的あるいは熱波的、光波的影響を強く受けて励起される気象的変動と地球内部の地殻活動に起因する地球表層の物理的変動、それに地すべりのように両者の合力的作用によって生じるものがあると思われる。

つまり発災は地球の属性によって惹起される類のものであることを見極め是認するならば、45億年前の地球生誕以来あり続けた古くて古い問題にすぎず、約20億年後の地球活動停止の時まで引き継がれる「地球生理」の鼓動とその消長であると理解してかかることが、今までの私共の認識に欠落していたのかも知れない。

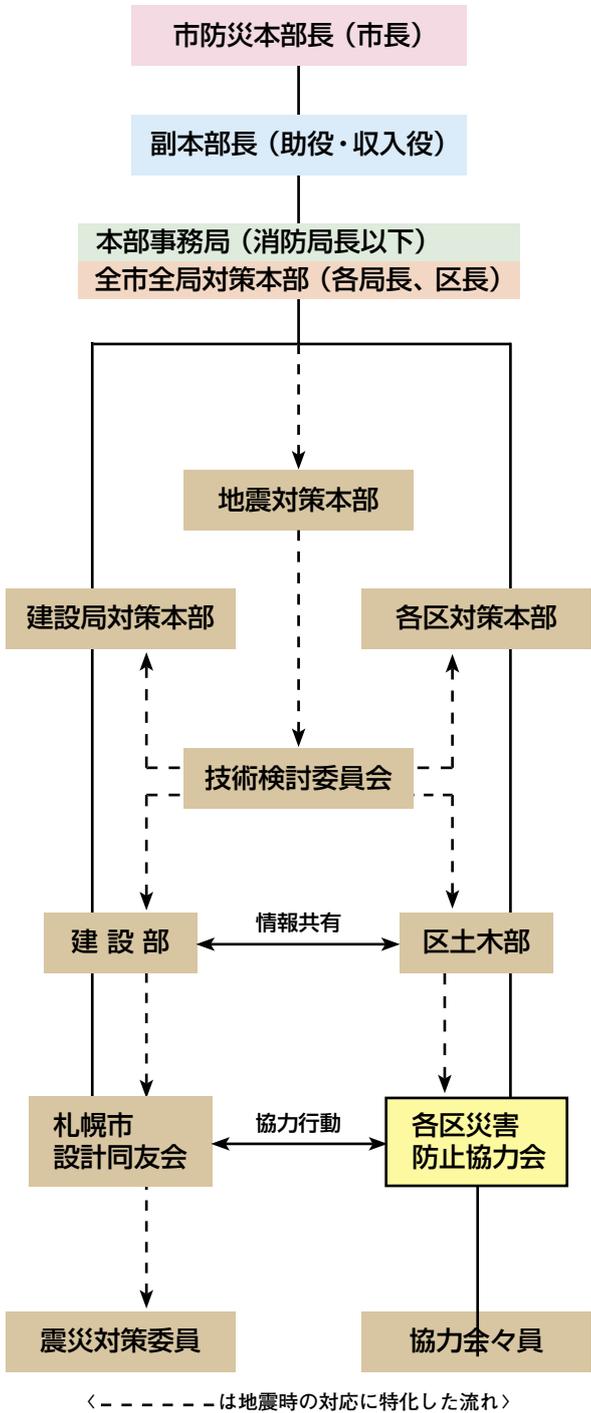
私共の命を生み育んだ地球は、やはりそれ自体が生命体であるはずで、そうでなければ地球上の生きとして生ける者の命を創造できるはずもない。地球が生理をもつ生命体と考えるなら、その誕生があつていいし、死があつてもいい。そして生活動を続ける限りは咳くしゃみがあつていいし、放尿脱糞、発汗よだれ、洩垂(はなたれ)があつてもいたし方ないし、ニキビ腫れ物、擦り傷、骨折などもあつてよいし、時には出血なども生理上健康な証しと見るべきであろう。

そういった宇宙上の地球丸という生命体の表皮に寝起きする私共は、生理の消えたような火星や水星上に住するのとは違う覚悟を持って、この巨大な生命に呼吸と脈拍と鼓動、時にその気分さえも窺わねばならぬ存在であるべきで、そのことに近年の日本社会はようやく気づき始めたような風向きを末端防災活動者として感じている。

95年(H7)1月17日払暁、53才の私の誕生日なので忘れないが、神戸の被災は日本国を震撼させると共に、その翌日には我国の緊急対応システムのまずさについて等しく国民へ知らせる契機となった。

政令都市としての札幌市は、直ちに多数の市職員を救援、調査あるいは復興のために被災地に派遣し、現地の市民や行政に貢献すると共に、多くの災害時対応についての生きたデータと情報を持ち帰ってもきた。それらを参考にしつつ同年内に札幌市は新たに防災会議をおこし、Provision Against Emergencies(通称ポパイ)計画を策定した。その後

見直しや改訂を加えられつつあるが、現時点での市の建設局部門の防災機能に占める各区災害防止協会の位置関係は、下図に示すとおりである。



阪神・淡路大震災の当時、白石防災協の副会長であった私は、その後4度に亘り震災被害と復興をこの目で確認するために現地を訪ねた。道路交通網の寸断と通信連絡網の破壊が市民生活を悲惨なものにし、街区復旧を極端に遅らせていたのを確認できた。感じる処あつて住宅地図帳にならった防災地図帳なる特許を申請してみたらノークレームで承認された。防災出動経験者なら判る事態だが、被災ポイントの確認とそれへの道順を救援隊に図書で示す作業は手間ひまを要し、火急の時にかなりの時間を消費するもので、これらの時間短縮と加えて防災施設の域内配置を明示することを意図して考案した。

ここで白石防災協の生立ちと近年の活動について触れてみたい。札幌市北部の低平地は開闢以来、石狩川や豊平川の氾濫に悩まされてきた。しかし、それら河川の築堤が整備されるにつれて水害の様子が変わり、むしろ内水による出水や溢水対応

近年の活動年賦	
防災講習会	防災活動他
H9	
4月25日 ・技術士防災研会：能登繁幸氏 「防災27の提言」 ・たくぎん総研：太田清澄氏 「都市の防災を考える」 ・室蘭工業大学：媚山政良氏 「寒冷地の雪山の利用」	・出 動：夏3回 冬3回 ・待 機： 3回 ・訓 練： 1回 ・河川清掃： 1回
H10	
4月27日 ・開発局石狩川開建： 原 哉也課長 「石狩川の総合治水 について」	・出 動：夏3回 冬1回 ・待 機： 2回 ・訓 練： 1回 ・河川清掃： 1回
H11	
4月22日 ・札幌土木現業所：野坂 課長 「旧豊平川を考える」 ・札幌市消防局：小田桐久信氏 「札幌市の防災システム」	・出 動：夏1回 ・待 機： 2回 ・訓 練： 1回 ・河川清掃： 1回
H12	
4月25日 ・札幌市消防局：小沢邦憲氏 「札幌市の新防災計画」 ・道開発コンサル：嫁兼敏和氏 「有珠山の噴火概況」	・出 動：夏3回 ・待 機： 2回 ・訓 練： 1回 ・河川清掃： 1回

がテーマとなっていた。73年(S48)、豊平川右岸の豊平区と白石区の地元土木業者が中心となり、「白豊緊急災害防止協力会」なる札幌市では初めての地元企業による防災組織が誕生した。

正真正銘のボランティア団体で、81年のいわゆる56災害としての記録的豪雨には、その存在が地元で大きな力となって貢献できたことは言うまでもない。しかし白石豊平の人口増加に伴い、84年(S59)には白石災防協と豊平災防協に別れ、今日まで互いにその伝統を継承しつつ間もなく共に30年になろうとしている。

当会の現状会員数は45社、地域毎にグループ化して6班編制で構成されている。札幌市の土木登録のランクでA-2とBが大多数を占めている報酬を求めない任意団体である。事業は総会・役員会、安全祈願祭、安全講習会、親睦会、防災訓練、河川清掃と独居老人雪対応、そして本番の防災出動である。それら近年の活動年賦の大略を前表に示した。

遡って96年(H8)秋、米カルフォルニア州の災害対応を見学に行くことになった。その年の記録的豪雪に苦勞した市の除雪部門の幹部に計画を打ち明けたころ、一般災害と重大災害の決定権者が誰なのかを調べてきて欲しいとの依頼があった。

89年のロマプリータ地震(サンフランシスコ)、94年のノースリッジ地震(ロサンゼルス)による大被

害を経験した州政府は、カルフォルニア工科大学のCUBE(地震情報即時放送)システムを実用化し、官民を問わず災害関係委員に24時間のポケベル携帯を委嘱していた。

災害関係委員は発災時、都市内は各区各域毎に、郡部は州の58郡すべてに専用を用意されているEOC(危機救援センター)に集合し、そのみで災害の内容と規模を定義し、かつ行政のBossやTopにはそれらの判断を求めてはならないという州法の制定がなされていた。我々の見学したEOCの座長はPIC(Public Information Coordinate)で官と民との中間に位置する情報調整的存在であるらしい。敢えて言うまでもないが、米国でいうPublicの意味は公共というよりも一般市民という方に主体と力点がある。

札幌に戻り、これらの図式を市長、助役にお見せし説明を加えたところ、大雪災害は交通障害を生むものでリアルタイムには人命に及ばないとのことから、提案していた「雪害」なる表現を直後の市議会で市政用語に加えていただき、かつ雪害と決断する宣言者は必ずしも市長まで到らなくても良いとなった。

ここで少し札幌市の新たな取組み「自主防災活動」について触れてみたい。市消防局は大災害が



発生し沢山のけが人や火災が同時発生する場合、通常の市消防能力では対応しきれない状況があり得るとの懸念を公表している。また、中規模災害であってもインフラ施設や道路の損壊が消防活動の大障害となるとも予測している。

白石区役所や同消防署、消防団は住民自らが出火を防ぎ、初期消火に努め、被災者の救出救護活動を行うことへの啓蒙に努める中で、組織の編成、リーダーの育成及び防災訓練に力を注いでいる。

それらの結果、自主防災の組織率は直近1月1日の消防局調べで全市内2,093単町の内の47%、白石区については全134単町の内の64%と市内のトップクラスに位置している。

白石防災協としても、発災時について「自主防災活動」への側面協力、つまり車輛、重機などの機動力について何れ要請があろうと予見している。

最後に白石区の防災連絡法の優れた点を紹介したい。神戸市役所専用の行政防災無線網は震災と同時に破壊した。地下の自家発電機の冷却管が破損したからであった。仮に無線機能が保全されたにしても大災害では役に立ちそうもない。それは

中規模以上の発災に際し連絡と会話を必要とする市職員相互の数に対し、市が専有できている回線数が余りにも少ないからである。

その神戸の反省をもとに、白石区土木センターに民間運営のMCA無線を数回線加入いただいた。山のない白石区は発信電波が手稲山に直進し、中継されて受信電波となって白石区に戻る経路にいささかの障害を持たない一帯である。

携帯電話の発達があり、MCA無用論も出てはいるが、携帯も回線あつての電話であることに相違なく、神戸では一般回線加入者が互いに直ぐに会話を切らないために回線パンクを起こしていた。MCAは現今の携帯電話に比べ大きさも重さも3倍程になるが非入会員が使用できず、かつ、1分間で自動的に回線アウトする仕組みになっているから、再び必ず交信が繋がるシステムで非常時・有事での活躍が期待できる。

ここに発災時出動に向けた「白石区災害防止協力会」の平素からの訓練とボランティア精神そのままに、区民・行政へ貢献しようとする多くの地元会員企業の心意気を末端防災活動者の立場から報告して本文を終えます。

